

平成28年度 日本訪問看護財団独自調査

訪問看護ステーションにおける
看護研究に関する実態調査

報 告 書

平成29年3月末日

公益財団法人 日本訪問看護財団

■ 目 次 ■

I.	調査概要	1
1.	目的	1
2.	方法	1
	1) 調査対象	
	2) 実施方法	
	3) 調査実施期間	
	4) 主な調査内容	
	5) 倫理的配慮	
3.	調査実施担当者	1
II.	調査結果	1
1.	回収状況	1
2.	対象者の属性	2
	1) 年代	
	2) 保有資格	
	3) 看護師経験年数	
	4) 最終学歴	
	5) 看護研究に関する教育	
	6) 看護・医療・福祉系の学会会員登録の有無	
3.	訪問看護ステーションの概要	3
	1) 設置主体	
	2) 開設後の年数と看護師の常勤換算数	
	3) 看護系大学とのかかわり	
	4) ステーションの研究環境	
4.	訪問看護ステーションでの看護研究経験	4
	1) ステーションでの看護研究経験の有無	
	2) ステーションでの研究経験が「ある」場合	
	①行った看護研究の種類	
	②研究を行ったきっかけ	
	③倫理審査の有無	
	④研究を行って良かったこと	
	⑤研究を行う際に難しかったこと	
	⑥共同研究者	
	3) ステーションでの研究経験が「ない」場合	
	①研究に取り組まなかった理由	
	②今後の研究への意欲	
III.	考察	8

I. 調査概要

1. 目的

看護実践の質の向上のためには、根拠に基づいた実践が重要であり、そのためには看護研究によって知見を得ることが必要不可欠である。在宅療養者への看護実践の質向上のために、訪問看護師が積極的に研究に取り組む必要性があると考え。医療施設における看護研究の実態は散見されるが、訪問看護ステーションにおける看護研究の実態に関する報告は見当たらない。

訪問看護ステーションは小規模の単独事業所が多く、病院などの医療施設とは実態が異なることが予測される。そのため、訪問看護ステーションにおける看護研究の実態や課題を明らかにすることを目的として本研究を行った。

2. 方法

1) 調査対象

当財団が把握している首都圏内 2,558 か所の訪問看護ステーション（以下、ステーション）のうち、無作為抽出した 500 か所のステーション管理者を対象とした。

2) 実施方法

無記名自記式、郵送法にてアンケート調査を実施した。

3) 調査実施期間

平成 29 年 1 月～2 月

4) 主な調査内容

回答者の属性、所属する訪問看護ステーションの概要、訪問看護ステーションでの看護研究経験、など

5) 分析方法

得られたデータは単純集計を行った。また、自由記載については質的に分析を行った。

6) 倫理的配慮

調査の実施にあたり、当財団の研究倫理委員会の審査を受け承認を得て行った。また、書面にて研究目的、プライバシーは厳守されること、調査への協力は任意であること、調査に協力しないことで一切不利益を被らないこと等を説明し、調査票の記入および返送をもって調査への同意を得られたものとした。

3. 調査実施担当者

研究計画の作成、調査の内容・方法、集計、分析及び報告書作成について以下の担当者で実施した。

- | | | | |
|-----------|----------|------|------|
| 1) 湯本 晶代 | 日本訪問看護財団 | 事業部 | 研究担当 |
| 2) 山辺 智子 | 日本訪問看護財団 | 事業部 | 研究担当 |
| 3) 佐藤 美穂子 | 日本訪問看護財団 | 常務理事 | |

II. 調査結果

1. 回収状況

有効回答数は 228 件、有効回答率は 46.9%であった。

2. 対象者の属性

1) 年代

回答者の年代は、50歳代が97名(42.5%)と最も多く、ついで40歳代(36.0%)、60歳代(10.1%)、30歳代(9.6%)の順であった。

図表 1 回答者の年代 n=228

	人数	割合
20歳代	3	1.3%
30歳代	22	9.6%
40歳代	82	36.0%
50歳代	97	42.5%
60歳代	23	10.1%
70歳以上	1	0.4%

2) 保有資格(複数回答)

保有資格は看護師が227名と最も多く、ついで介護支援専門員が多かった。

図表 2 保有資格(複数回答)

	人数
准看護師	14
看護師	227
保健師	14
助産師	6
介護支援専門員	68
専門看護師 ^{※1}	2
認定看護師 ^{※2}	14

※1: 在宅看護専門看護師(1名)、
老人看護専門看護師(1名)

※2: 訪問看護認定看護師(11名)、
緩和ケア認定看護師(2名)、
摂食嚥下認定看護師(1名)

3) 看護師経験年数

看護師経験年数(通算)は平均24.4±8.3年で、そのうち、訪問看護経験年数は平均10.0±6.4年であった。

4) 最終学歴

看護専門学校卒業が183名と最も多く、およそ80%を占めていた。ついで、看護系短期大学卒業が21名(9.2%)、看護系大学卒業が10名(4.4%)の順に多かった。

図表 3 最終学歴 n=225

	人数	割合
看護専門学校卒業	183	81.3%
看護系短期大学卒業	21	9.3%
看護系大学卒業	10	4.4%
看護系大学院修士課程修了	5	2.2%
看護系大学院博士課程修了	1	0.4%
その他	7	3.1%

5) 看護研究に関する教育

研究方法に関する教育を受けた経験のある者は149名(65.4%)と半数以上を占めていた。一方、研究倫理に関する教育を受けた経験のある者は106名(46.5%)であった。

6) 看護・医療・福祉系の学会会員登録の有無

看護・医療・福祉系の学会に会員として登録している者は63名(27.6%)であり、過去3年間に学術集会(学会)へ参加した者は79名(34.6%)であった。また、これまでに学会において研究の成果を発表した経験がある者は63名(27.6%)、投稿論文発表経験がある者は23名(10.1%)であった。

学会以外の場所で研究成果を発表したことがある者は52名(22.8%)であり、発表場所として院内の研究発表会、法人内の研究発表会、地域の研究発表会、訪問看護ステーション協議会内の研究発表会が挙げられた。

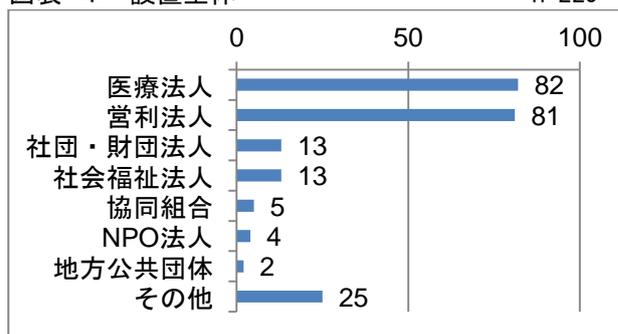
3. 訪問看護ステーションの概要

1) 設置主体

設置主体は、医療法人 82 名、営利法人 81 名の順に多かった。

図表 4 設置主体

n=225



2) 開設後の年数と看護師の常勤換算数

開設後の年数は、10 年以上が最も多く、ついで 1 年以上 3 年未満、3 年以上 5 年未満であった。

また、看護師の常勤換算数は 3 人以上 5 人未満のステーションが最も多く、平均 5.59 名 (n=208) であった。

図表 5 開設後の年数

n=218

	人数	割合
1 年未満	15	6.6%
1 年以上 3 年未満	36	15.8%
3 年以上 5 年未満	36	15.8%
5 年以上 10 年未満	25	11.0%
10 年以上	106	46.5%

図表 6 看護師常勤換算数

n=208

	人数	割合
2.5 人以上 3 人未満	35	15.4%
3 人以上 5 人未満	89	39.0%
5 人以上 7.5 人未満	42	18.4%
7.5 人以上	42	18.4%

3) 看護系大学とのかかわり

訪問看護ステーションと看護系大学とのかかわりを尋ねたところ、「関わりはない」が最も多く、ついで「実習を受け入れている」であった。

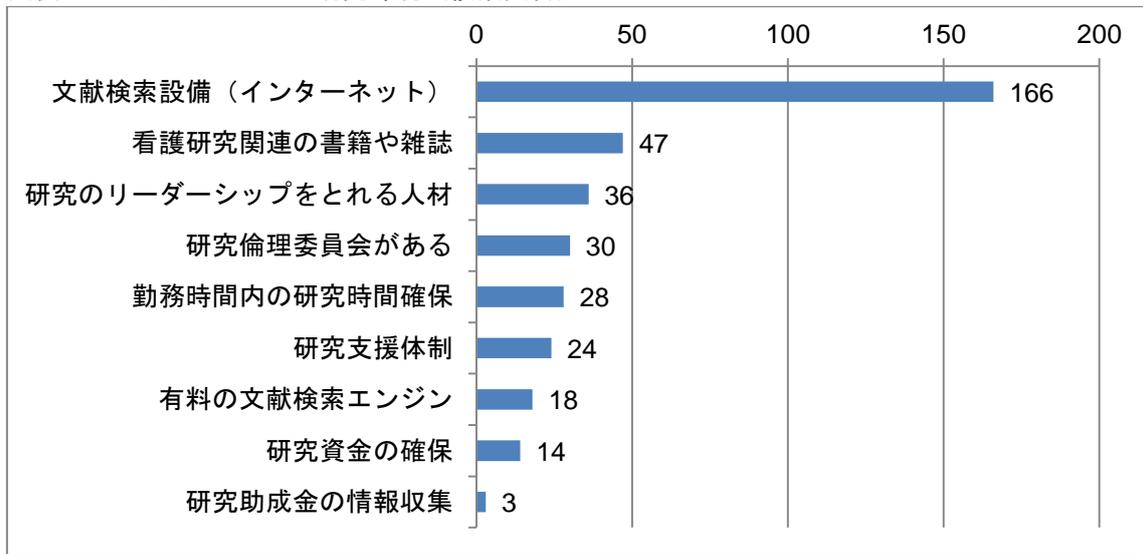
図表 7 看護系大学とのかかわり (複数回答)

	n
関わりはない	116
実習を受け入れている	96
大学での講義を依頼されている	11
共同研究を行っている	2
大学に研修講師を依頼している	2

4) ステーションの研究環境

ステーションの研究環境（複数回答）は、「文献検索設備（インターネット環境）が整っている」166名、「看護研究に関連した書籍や雑誌を閲覧できる」47名、の順に多かった。

図表 8 ステーションの研究環境（複数回答）

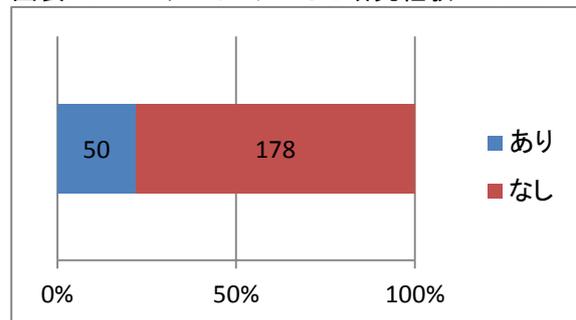


4. 訪問看護ステーションでの看護研究経験

1) ステーションでの看護研究経験の有無

訪問看護ステーションでの研究経験がある者は、50名（21.9%）であった。

図表 9 ステーションでの研究経験 n=228



2) 訪問看護ステーションでの研究経験が「ある」場合（n=50）

①行った看護研究の種類

訪問看護ステーションで行った研究は、事例研究が最も多く、ついでアンケート調査であった。

図表 10 研究の種類（複数回答）

研究の種類	n
事例研究	35
アンケート調査	16
インタビュー調査	12
その他	1
無回答	3

②研究を行ったきっかけ

研究を行ったきっかけを自由記載で尋ねたところ、以下の回答が得られた。

- ・実践の振り返りのため
- ・所属機関・協議会などの発表当番だったため
- ・ケアの改善のため
- ・ケアの効果検証のため

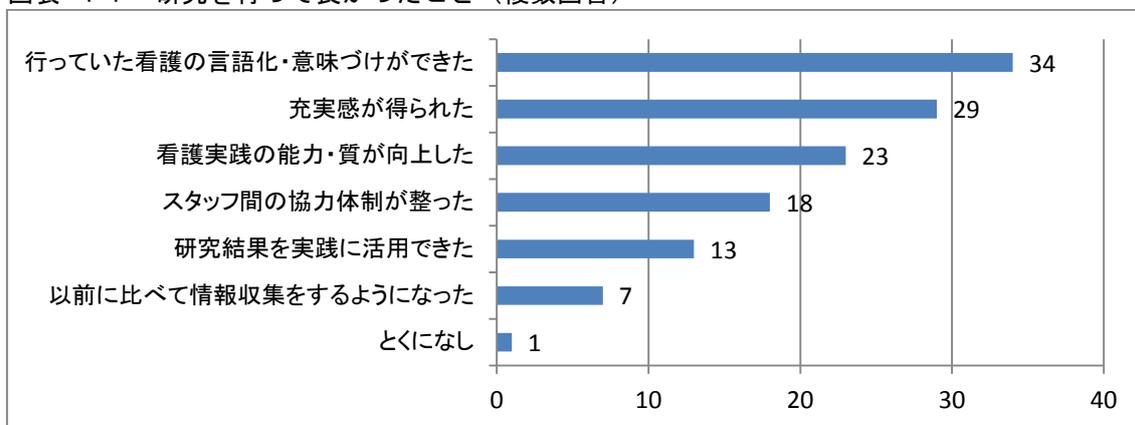
③倫理審査の有無

倫理審査を受けた者は14名(28.0%)であり、倫理審査申請先は、法人内の倫理審査委員会6名、院内の倫理審査委員会5名、協議会の倫理審査委員会1名であった。

④研究を行って良かったこと

研究を行って良かったことは、「行っていた看護の言語化・意味づけができた」、「充実感が得られた」、「看護実践の能力・質が向上した」、の順に多かった。

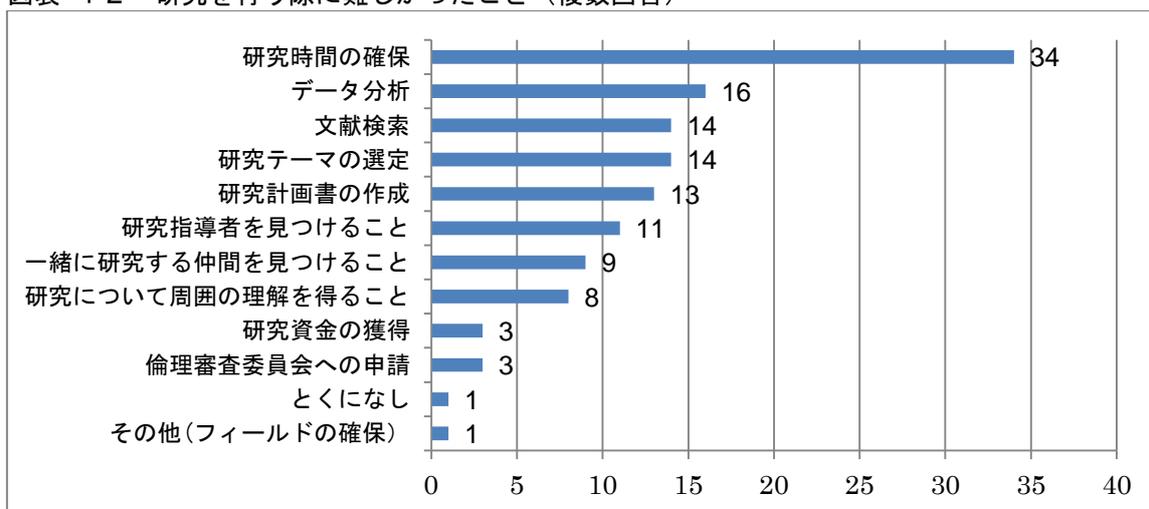
図表 1 1 研究を行って良かったこと（複数回答）



⑤研究を行う際に難しかったこと

研究を行う際に難しかったことは、研究時間の確保、データ分析、文献検索、研究テーマの選定、の順に多かった。

図表 1 2 研究を行う際に難しかったこと（複数回答）



⑥共同研究者

共同研究者について複数回答で尋ねたところ、「事業所内のスタッフ」が最も多く、ついで「大学教員」「なし（単独）」の順であった。

図表 13 共同研究者（複数回答）

	n
事業所内のスタッフ	40
大学教員	8
なし（単独）	8
他事業所の訪問看護師	2

以下、「大学教員と共同研究を行なった」と答えた方にのみ回答を求めた（n=8）

⑦-1 大学教員との関係

共同研究を行った大学教員との関係は、実習を受けている大学の教員3名、実習を受けていない近隣の大学教員3名、その他2名（法人の研究アドバイザーなど）であった。

⑦-2 大学教員と共同研究を行ったきっかけ

大学教員と共同研究を行ったきっかけを自由記載で尋ねたところ、以下が挙げられた。

- ・法人/母体病院からの紹介
- ・過去に論文の執筆指導を受けた
- ・訪問看護ステーション連絡会を通して知り合った
- ・公開講座に参加した
- ・実習を引き受けている大学教員から研究を勧めてもらった

⑦-3 大学教員と共同研究を行って良かったこと

大学教員と共同研究を行った利点を自由記載で尋ねたところ、以下が挙げられた。

- ・ひとりではまとめきれないが、サポートで完成した。知識も深まり、学会発表につながられた
- ・データの出し方の指導を受けることができた
- ・分析などの方法、手順、考察、文章化などについて、指導・協力が得られた
- ・現場の課題を研究としてとりあげる機会となり、分析方法を学んだ

⑦-4 大学教員と共同研究を行って困難だったこと（自由記載）

大学教員と共同研究を行った際の困難を自由記載で尋ねたところ、以下が挙げられた。

- ・業務をしながらの教員との調整が大変だった/時間が合わず、メールでの指導だった
- ・やりたい形の手前の段階での研究でとどまってしまった
- ・通学が大変だった

⑦-5 研究プロセスにおいて大学教員が関わった程度（n=7）

研究テーマの設定から発表にいたるまでの各研究プロセスにおいて、大学教員が関わった程度を尋ねた。

とくに“研究テーマの設定”、“研究方法の決定”、“研究計画書の作成”、“調査結果分析”と“まとめ（文章化）”に関しては、大学教員が関わっていた。

図表 14 大学教員が関わった程度

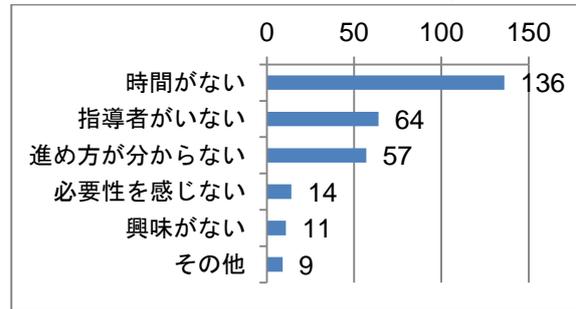
	n=7		
	関わった	関わっていない	無回答
研究テーマの設定	5	2	0
研究方法の決定	5	1	1
研究計画書の作成	5	2	0
倫理審査申請書作成	2	4	1
調査実施	3	3	1
調査結果分析	6	0	1
まとめ（文章化）	6	0	1
発表	1	5	1

3) 訪問看護ステーションでの研究経験が「ない」場合 (n=178)

①研究に取り組まなかった理由(複数回答)

研究に取り組まなかった理由としてもっとも多かったのは、「時間がない」136名であった。ついで、「指導者がいない」64名、「進め方が分からない」57名の順であった。

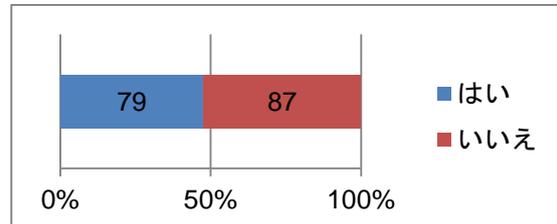
図表 15 研究に取り組まなかった理由 (複数回答)



②今後の研究への意欲

訪問看護ステーションにおける研究経験のない者のうち、今後、研究を行いたいと回答した者は79名(44.4%)であった。

図表 16 今後の研究への意欲 n=178



今後の研究の意欲に関する回答理由を自由記載で尋ねた。主な内容を以下に示す。なお、() 内の数字は、回答数を表す。

「研究を行いたい」と回答した方 (n=79)

<研究を行いたい理由>

- ・看護の質の向上のため(8) ・訪問看護を広く伝えたい(4)
- ・ケアの有効性/エビデンスの構築(3)
- ・ビジネスにしていくうえで必須(1) ・訪問看護の可能性を探りたい(1)
- ・意欲が増す(1) など

<研究を行うために必要な条件>

- ・支援体制(指導者)(26) ・時間(23) ・人員(11)
- ・支援体制(研修)(6) ・教育機関との連携(5) ・資金の支援(5) ・意欲(5)
- ・人材(4) ・法人(職場)の協力・理解(4) ・関心のある研究テーマ(2)
- ・経営の安定(1) ・研究に必要な体制整備(1) ・他事業所の専門職との協働(1) など

「研究を行いたくない」と回答した方 (n=87)

<研究を行いたくない理由>

- ・時間が確保できない(11) ・職員数の不足(11) ・指導者・相談者がいない(3)
- ・日々の業務で手一杯(9) ・必要性を感じない(2) ・運営を軌道に乗せるのが最優先(2)
- ・興味がない(1) ・意欲がない(1) ・経済的に不可能(1)
- ・環境が整っていない(1) ・法人の理解がない(1) など

Ⅲ. 考察

今回の調査結果より、病院看護師と比較して、訪問看護師の研究経験が少ないことが明らかになった。しかし、訪問看護ステーション（以下、ステーション）での研究経験者の約7割が、研究を行うことにより看護の言語化や意味づけができたと回答しており、研究は訪問看護師のモチベーションの保持につながるといえる。また、研究を行うことにより看護実践の能力や質が向上したという回答もあり、研究は訪問看護師と利用者双方にメリットがあると考えられる。

ステーションで研究を行った経験がないと答えた方のうち、4割程度が研究を行いたいと回答していた。しかしその一方で、ステーションにおける研究支援体制（指導者）が不足していると感じていることも明らかになった。その理由として、病院と比較してステーションは事業所の規模が小さいため、スタッフの人数が少ないことや、教育・研究に関連したさまざまなサポート体制が整っていない可能性が考えられる。これらより、それぞれの地域において、訪問看護師が研究を行う際に、必要に応じて大学教員などからの支援が受けられる体制を整備する必要性が示唆された。

謝辞

お忙しい中、本調査にご協力いただきました訪問看護ステーション管理者の皆様に、心より御礼申し上げます。